

物理屋 8 年生の雑感

須藤 靖 (物理学専攻)



物理学教室を1986年に卒業した後、カリフォルニア大学バークレー校に2年、茨城大学に2年、広島大学理論物理学研究所に3ヵ月、京都大学基礎物理学研究所に3年、と転々として、昨年7月1日より再び物理学教室のお世話になることとなった。8年間という時間が長いか短いかは主観によるであろうが、当教室もずいぶん雰囲気が変わったように感じる。数えてみると私が在籍していた時期にはいらっしやらなかった先生方が11人。助手の方まで含めれば、半数以上のスタッフの顔ぶれが替わっている。このような世代交代の速さは当教室の活動性の高さを物語るもので、誇り得る事実だと思う。

ところで、この理学部広報という冊子は誰を対象にして発行されるものなのかよく知らないのですが、どちらかといえば私より下の世代の方を想定して単なる雑感を書き連ねてみたい。“釈迦に説法”を避けるためにも私より年配の方は、(本来の自己紹介という趣旨にあった最後の段落以外)読みとばして頂ければ幸いである。

少しばかり研究者の世界を経験すると、かつて自分が想像していたような一元的な研究者の資質というものには存在しないことを思い知らされる。特に中学・高校という段階では、学生を成績に

よって一次元に序列化することが日常的に行われる。そこでは、数学と国語と英語の点数を合わせて平均するなどという無茶な操作が堂々とまかり通るのみならず、それによって進路が左右される。さすがに大学に進むとそんな極端なこととはなくなるが、私のごく平均的な成績のものは、試験で優ばかりの友人を見て(当時は主任秘書室に学部学生全員の成績一覧表があり、自分の成績を調べに行くと他人の分まで目に入ってしまう仕組みであった)、“このぐらい優秀な成績でなくては研究者にはなれないのだろうか”などと消沈していたものである。つまり、まだ一次元的価値観に支配されていたわけだ。

しかし当たり前ではあるが、実際には極めて多様なタイプの研究者がいる。私は宇宙物理学という比較的学際的な分野を専攻しているせいなのかもしれないが、必ずしも目から鼻に抜けるような秀才だけが優れた研究成果を挙げているとは限らない。勘が良く頭の回転が速く何でもすぐ理解できるが、発展させることが苦手な人、時間はかかるが極めて深い理解に達する人、議論してみると必ずしも正しい問題意識を持っているとは思えないにもかかわらず一度ならず独創的なアイデアを発表し続けている人、自分自身の独創性は別にしても他の論文の結果を適切に発展させてはるかに優れた仕事に完成させる人、一度読んだ論文は詳細に至るまで記憶にとどめている人、恐ろしく複雑な解析計算を間違えることなくできる人、手計算は苦手でもコンピューターを用いた数値解析が迅速確実である人、さらには昼夜の区別なく常に働くことのできる人(天文観測にとっては実に重要である!)等々、つくづく人間の才能というのは様々だなあと感じる。また、“学者”という総

称より連想されるステレオタイプ（無口，変人，真面目……）から，はるかにかけはなれたスペクトルの集団がそこにある。大した仕事をしていなくてもプレゼンテーションが素晴らしい人，押しが強く研究費を獲得する能力が抜群の人（これは特に実験系のボスとなるには必須の才能である），毎日居酒屋のアルコールを栄養にして活発に研究を進めている人…，というわけで，およそ当理学部の学生程度の資質をもって己の適正をうまく活かすことさえできれば，誰でも“それなりの”研究者になれる可能性はある。ポイントは，多次元にわたっているはずの自分の能力をしっかり把握して，人より劣っている面と優っている面とを理解しておくことであろう。

ところで，この多次元の才能をどの方向に射影しても傑出しておられた数少ない方の一人が，前名古屋大学学長の故早川幸男先生である。最近，生前の文章をまとめた遺稿集“素粒子から宇宙へ”（名古屋大学出版会）が出版されたので読んでみた。この本には自然を探求する科学者のあるべき姿が随所に散りばめられている。曰く，「研究費の不足を叫ばない学者は怠け者であり，封建性を感じない学者は創造力を失っている」，「雑用

が多くて研究ができないと口ぐせのようにいう人が多いが，それは全く事実である。しかし，雑用がなくなったら，その人はもっと困るであろう。研究は依然としてできない上，雑用がなくて手持無沙汰になるし，いいわけのたねもなくなるから。」…日本の学術体制の確立のため日夜奔走し，大学長の激務をこなしながらも終始新しい物理の研究を自ら切り開いてこられた早川先生の言葉だけに，赴任以来「大学に来ると雑用ばかり多くて…」，とぼやいてばかりの自分が恥ずかしくなる。

さて，私より下の世代の方を想定して，などと始めたものであるから，年の割に教条主義的な内容になってしまったことをお許し頂きたい。

最後になったが，私の名字は濁らずに“すと”と読む。珍しいですね，とよく言われるし，電話では“すどう”と発音しなくてはほとんど通じない。手元の“1990年版日本物理学会会員名簿”によれば，同じ名字の方が9人，うち私を含めて4人が濁らない。この事象の統計的な有意度は？ などといった理学部職業病的な議論を勘弁してもらえば，決して少数派とはいえないはずなのだが…。

